

新春の文樂座

古鞆の寺子屋

美保土筆

新春の文樂座。晝の部の第一は「出陣」西亭の作品中ではいゝ部に屬するもの。巴御前は相生、伊達の一曰替りて相生は前半、伊達は後半が勝れてゐる。濱の義仲は冒頭の謡地が特にいゝ。ツレには取立てゝいふ程のものもない。糸は前半の立が吉五郎、喜左衛門の一日替り。後半は清二郎、喜左衛門は痛いものに觸はる様に大事過ぎて聊か冗漫、その點吉五郎は成功。清二郎は健腕だが掛け聲が多くお負けに騒々しい▲第二の「先代萩」竹の間（源、松之輔）八汐をモット上品に語れば更に一段の効果を上げたのに……聲量も豊富な大夫だが所謂鈍才、氣の毒な者である。糸の松之輔は神妙。▲御殿（呂、友衛門）相變らず開口に難はあるが眞摯にして熱演、晝の部の收穫である、糸友衛門は情けないあれでいゝか。伊達のおかるは得意の壇場色氣こそ乏しいが「ヤア~~~~」それはまアホンかいなや「おかるは始終せき上げ~~~~」などと當代無類、相生の平右衛門、不思議と生彩を放たなかつたのは残念。三人侍は呂、源、濱で活氣横溢、富の伴内は尻の如きもの、糸は前半が清八、後半は吉五郎、喜左衛門の一日替り

清八は凡庸、吉五郎は柔かく、喜左衛門は右の手に難はあるが音色がいゝ。

■夜の部の第一「式三番叟」住、南部、七五三、雛その他で殊更いふ程の事もないが莊重味に乏しく徒らに騒々しかつたのが瑕。糸は重造以下「三日これを舞ふとかや」の末段は達者揃ひだつたがハツキリと揃ひ兼ねた▲第二菅原築地（雛、廣助）菅秀才が源藏夫婦に匿はれ近頃クツクリ腕を上げた様である、大役は勤めねばならぬもの、一頃より貫祿の加はつた事は争はれぬ、唯ハリキリを一手で押通すのは考へもの、時と場合で堂々たる重ね撥のハリキリも用ゐねば嘘である。政岡忠義（重、仙糸）言葉の定間にはホト~~~~愛想が盡き、勝手氣儘な地合の音遣ひには小腹が立つやら可笑しいやら、糸の仙糸、萬事が投げ氣味、口説きの速さなど、これも言語道斷。迷惑なのは政岡の人形紋十郎で振りが團子にならなかつたのはまだしも大慶▲第三の忠臣蔵一力茶屋。大隅の由良之助、師匠の遺鉢は傳へても、表面丈け、些とも吐のない由良之助で、これがホントの晝行燈のやうな人物、重の九大夫言葉に變化なく、幕明きの「然らば斯うおいで……」の武士訛りさへ御存じない其意味をハツキリさす爲この場を出したのは珍らしく菅原相の這入りまでが身上、この人近頃、進境の見え出したのは頼母しい。寺入（宮、八造、錦糸）一向に風味ない、糸の八造、錦糸は一日替りで可憐いゝ藝を持ち乍ら時にボンヤリと節落ちを忘れるなど八造の爲に惜み度い寺子屋（古鞆、清六）初中後、中段に屬する首實檢の間の長

かつたのを白玉の微瑕として殆んど完璧の出来である。去年十月に演じた道明寺以上の傑作で、我等最も後半を推奨仕度い。松王の述懐も思ひの外淡々と、千代の愁嘆も諄からず、松王も泣き笑ひに至つては蓋し一段中の白眉。いろは送りの

哀愁味も捨てられなかつた。糸の清六は先興行の佐太村より數等面白く「死骸を網代の乗物に」なんども撥遣ひと音色、いろは送りの玄妙、巧緻、知らずく陶酔境に導くものがある▲第三廿四孝十種香（南部、寛治郎）舊臘來健康を損ねてゐると見え聲の尖きにムラがある様だが、氣品と云ひ愧ばせて居た。糸の寛治郎、音色は冴えぬが萬事心得たものでスツキリとした出来栄である▲狐火七五三、綱造、ツレ友平、琴（寛弘）品のない八重垣姫、可惜美聲を持ち乍ら一向に發揮し得なかつたのはどうした譯か。糸の綱造、達者といはふか元氣といはふか、イヤハヤ何とも御挨拶の致し様もない。

▲人形では榮三の松王、文五郎の千代を双璧に、文五郎の八重垣姫は喜壽の老人とも思へぬ元氣なもの紋十郎のおかるは情味もあり又美しく、玉助の由良之助はメツキリ餘裕の加はつたのが收穫、勝頼は氣品もあり落着も失はず天晴れの出来である、光造の八汐は一通り、三番叟は榮五郎と共に飄逸味の點が未だし、榮三郎の戸浪は氣を入れて油斷がない。龜松の平右衛門、源藏共に熱演、昂奮の程度はいつも程にないが總て此の位の調子であつて貰ひたい。紋司の濡衣はいつも乍らの持役。此の興行から門造が病氣快癒して、九大夫と翁その他を遣つてゐる。

必勝昭和二十年の 淨瑠璃奉仕

神國謙讓の美德に乘じ第一次世界大戰の直後より米鬼は打倒目標を日本と決定し、表に名を甘美なる世界平和・日本親善・軍備縮小に藉り裏に宇内の君子國にして最強日本の足を揉ぎ手を撈り其の爲す能はざるを俟ち撞に世界に命令し各民族の膏血を啜り盡くさんと心に默慾を懷き爪牙鋭く砥ぎ澄まし大正十一年の華頓條約、昭和五年の倫敦條約を主核とし秋毫の假藉もなく傲然臨み來れり。

君子國たる日本國民中に或る部落または米英思想崇拝者なしと斷すべからず既に渠の呪言に陶酔し昏迷遺憾にも非國民を輩出するに至りたるは其の巧妙否寧ろ詐瞞狡猾なる外交的手腕の成功を否定すべくもあらざる所なり。本誌は敢然これ等極惡の徒輩に排擊筆誅を加へ只管大和魂淨瑠璃精神の昂揚鍛鍊に邁進し來りたる事久し更に大東亞建設に關する限り政府の施設を翼賛し戰爭完遂、極樂淨土の出現に盡瘁するの覺悟を有す。蓋し廣大無邊なる聖業に奉仕翼賛身命を賭すべきは日本國民報公の常道にして淨瑠璃人は淨瑠璃の詞章管譜曲節等悉く萬全を期し改善を加へ以て大東亞共榮圈の指導誘掖に適切なる手段方策を講すべきなり。忠君愛國、一年の謀は元旦にあり、仁義に敦く情愛に溢るゝ純真なる斯道家は其の筋の企畫施設に呼應戮力し大に日本魂を揮起し世界永遠の平和に貢獻せん事を切に冀望する所なり。（美武良黄風生）